

平成22年 6月10日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520053
 研究課題名 (和文) 『金光明経』を通して見るインド大乘仏教の姿
 研究課題名 (英文) The Characteristics of the Indian Buddhism in the Light of the *Suvarṇaprabhāsa*
 研究代表者
 鈴木 隆泰 (SUZUKI TAKAYASU)
 山口県立大学・国際文化学部・教授
 研究者番号：20282709

研究成果の概要 (和文)：(1) 『金光明経』チベット語訳の校訂作業を行い、1940年代以降停滞していた『金光明経』のテキスト研究に進展をもたらした。

(2) 『金光明経』に含まれる諸品のうち、「僧慎爾耶葉叉大将品第十九」(2007年度)、「善生王品第二十一」(2008年度)、「諸天葉叉護持品第二十二」(2009年度)の三章を綿密に検証し、これまで看過されてきたインド仏教の特徴の一端を明らかにし、インド仏教の実像理解に資した。

研究成果の概要 (英文)：(1) The textual study of the *Suvarṇaprabhāsa* (*Suv*) has been developed through the critical editing of the Tibetan version of this Mahāyāna sūtra literature, which seems to have been paid rather scant attention by the modern scholarly world since 1940s.

(2) The careful examination of these three chapters in the *Suv*, that is, the *Samjñāya-parivarta* in 2007, the *Susambhava-parivarta* in 2008, and the *Yakṣāśraya-parivarta* in 2009, made the characteristics of the Indian Buddhism clear which have long been overlooked, and made a contribution to the deeper understanding of the real image of the Indian Buddhism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学

キーワード：大乘経典、インド仏教の実像理解、宗教における教義と儀礼、宗教における本音と建て前、大乘仏教の社会的認知、出家者と在家者の関係、仏教の衰亡と延命策、布施

1. 研究開始当初の背景

(1) 『金光明経』はアジアの広範囲に伝播し、

永年に亘って信奉され、アジア文化史の形成に大きな影響を与えてきた経典であるが、「1. テキスト研究がほぼ完了したと見なされていたこと」「2. 教説にオリジナリティが乏しいこと」「3. 儀礼的・呪術的要素を多く含み、哲学的・論理的アプローチがしにくかったこと」「4. 特定の宗派の所依経典となっていないこと」等の理由のため敬遠され、『金光明経』の解明に大きな進展が見られなかった。

(2) しかし近年、律文献や考古資料を活用した諸研究が相次いで提出されたことで、『金光明経』の諸特徴が、それらの研究から導かれる結果と密接に関係している可能性の高いことが分かってきた。すなわち、律文献や考古資料から導かれる仮説が、従来の研究の枠組みには収めとれなかった『金光明経』の諸特徴を説明してくれると同時に、『金光明経』という大乘経典文献資料が今度は、律文献や考古資料の記述を裏付けるものとなっていたのである。

(3) 大乘仏教は、その文献資料の上限は紀元前後にまで遡れるにも関わらず、考古資料に関する限り、紀元 5、6 世紀以降のものしか確認できないとの報告がある。したがってその報告に拠るならば、大乘仏教のインド社会における一般的認知は、紀元 5、6 世紀以降との推定が成り立つことになる。その時期はグプタ期を経て仏教が斜陽になっていく時代であると同時に、『金光明経』が編纂・増広されていった時代とも重なってくる。応募者は、これらの事象をいくつかの傍証のもとに連関させ、インド仏教の実像理解に向けた〈仮説〉を提示していた。

2. 研究の目的

(1) 諸版本、諸写本に基づき、『金光明経』チベット訳の校訂テキストを作成する。

(2) 作成した校訂テキスト、サンスクリット刊本、三種の漢訳に基づいて〈仮説〉の有効性を検証し、インド宗教文化理解・インド仏教実像理解へ寄与する。

3. 研究の方法

(1) 諸版本 (Peking 版, Narthang 版等) と諸写本 (Stog Palace 写本, Tokyo 写本等) のカンギュル Kanjur 資料を入手してデジタル・アーカイブ化し、サンスクリット刊本 *Suv₇* (*Suvarṇabhāṣottamasūtra*, ed. J. Nobel, Leipzig, 1937)、三種の漢訳 (*Suv_{C1}* (『金光明経』四巻、曇無讖訳, T. No. 663); *Suv_{C2}* (『合部金光明経』八巻、宝貴合糅, T. No. 664); *Suv_{C3}* (『金光明最勝王経』十巻、義浄訳, T. No.

665) を参照しつつ、チベット訳の校訂テキストを作成する。

(2) 作成した校訂テキスト、サンスクリット刊本、三種の漢訳に基づきながら、『金光明経』の諸品のうち、2007 年度に「僧慎爾耶葉又大将品第十九」(*Samjñāya-parivarta*)、2008 年度に「善生王品第二十一」(*Susambhava-parivarta*)、2009 年度に「諸天葉又護持品第二十二」(*Yakṣāśraya-parivarta*) の記述を綿密に調査し、『金光明経』の制作意図に関する以下の〈仮説〉の有効性を検証した。

提示した〈仮説〉

- 大乘仏教徒の生き残り策としての経典：『金光明経』に見られる、従来の仏典では余り一般的ではなかった諸特徴は、仏教に比べてヒンドゥーの勢力がますます強くなるグプタ期以降のインドの社会状況の中で、余所ですでに説かれている様々な教説を集め、仏教の価値や有用性や完備性をアピールすることで、インド宗教界に生き残ってブッダに由来する法を伝えながら自らの修行を続けていこうとした、大乘仏教徒の生き残り策のあらわれである。
- 一貫した編集意図、方針：『金光明経』の制作意図の一つが上記の「試み」にあるとするならば、多段階に渡る発展を通して『金光明経』制作者の意図は一貫していた。
- 蒐集の理由、意味：『金光明経』は様々な教義や儀礼の雑多な寄せ集めではなく、『金光明経』では様々な教義や儀礼に関する記述・情報を蒐集すること自体に意味があった。

4. 研究成果

(1) 版本 (Peking 版, Narthang 版, Derge 版, Lhasa 版) と写本 (Stog Palace 写本, Tokyo 写本, Phug drag 写本) を用いて、「僧慎爾耶葉又大将品第十九」(*Samjñāya-parivarta*)、「善生王品第二十一」(*Susambhava-parivarta*)、「諸天葉又護持品第二十二」(*Yakṣāśraya-parivarta*) 三章のチベット訳校訂テキストを作成し、〈仮説〉の有効性の検証に用いた。

この新校訂テキストは、これまで『金光明経』チベット訳の底本とされてきた *Suv₇* (*Suvarṇaprabhāṣottamasūtra*; *Die Tibetischen Übersetzungen mit einem Wörterbuch*, Leiden, 1944) の編者である J. Nobel が参照していない版本・写本を用いている点に最大の特徴がある。とりわけ、チベ

ット大蔵経カンギル部に関する研究 (Kanjur Studies) が大幅に進展し、カンギルの諸系統が徐々に解明されるにつれ、*Suv*₇ は Them spangs ma 系 (西系統) の資料の取り扱いが不十分であることが明らかとなっていた。今回、Peking 版、Narghang 版に加え、Stog Palace 写本、Tokyo 写本という Them spangs ma 系に属する写本の読みを反映させたことで東西の系統が基本的に網羅されたことになり、本研究が作成したテキストは現時点で最も信頼のおける校訂テキストの一つとなり、本研究の行なう「〈仮説〉の検証作業」の信頼性の根底を支えるものとなった。

(2) 〈仮説〉の検証作業の結果を以下に順に示す。

①2007 年度：『金光明経』のうち、2006 年度までに調査の済んでいた「四天王品 (*Caturmahārāja-parivarta*)」、「弁才天女品 (*Sarasvatī-parivarta*)」、「吉祥天女品 (*Śrī-parivarta*)」、「堅牢地神品 (*Drdhā-parivarta*)」に後続し、それら〈諸天に関する五品〉の末尾に位置する「僧慎爾耶藥叉大将品 (*Samjñāya-parivarta*)」に焦点を当てつつ、〈五品〉全体の特徴を明らかにすることで〈仮説〉の検証を行った。その結果、

◆ 『金光明経』の制作者は〈五品〉の教説を通じ、繁栄や勝利などの世間的利益を求める王族階級の人々を領民共々仏教に誘引し、伝法や修行という自らの目的を達成するため、彼らから経済的援助を得ようと試みた。

という結論を得たことで、〈仮説〉の有効性が一層確かめられた。

②2008 年度：『金光明経』のうち、世俗的利益を中心に説く連続した六章 (〈諸天に関する五品〉および「王法正論品 (*Devendrasamaya-parivarta*)」) に後続する「善生王品 (*Susāmbhava-parivarta*)」に焦点を当て、引き続き〈仮説〉の検証を行った。その結果、

◆ 伝法や修行という自らの目的を達成するため、『金光明経』の制作者は〈五品〉や「王法正論品」等の教説を通じ、世間的利益を求める人々からの経済的援助を得ようと試みたが、同時に彼ら制作者は『金光明経』・法師・現前サンガに対する布施による無上菩提・法身獲得を説く「善生王品」の教説を通じ、出世間の利益を求める人々からも経済的援助を

得ようと試みた。

という結論を得たことで、〈仮説〉の有効性が一層確かめられた。

また、検証の途上、『金光明経』における仏塔 (ストゥーパ *stupa*) 信仰と經典崇拜との関係を巡る問題も再浮上してきたため、重ねて考察を加えた。

③2009 年度：『金光明経』のうち、「善生王品」に後続する「諸天藥叉護持品 (*Yakṣāśraya-parivarta*)」に焦点を当て、引き続き〈仮説〉の検証を行った。その結果、

◆ 仏教の存続に危機意識を抱いた『金光明経』の制作者たちは、王族を民衆ともども仏教に誘引し、彼らから経済的支援を得てインド宗教界に踏みとどまるため、世間的利益の獲得を主題とする〈諸天に関する五品〉、「王法正論品」、「諸天藥叉護持品」等を編纂していった。

◆ その際には従来の仏教では一般的ではなかった儀礼・呪術的諸要素を次々と取り入れていったが、『金光明経』における衆生利益は、仏教の伝統に則り釈尊の成道・法身獲得と不可分に結びつけられていたため、従来の理解や文脈を破壊したり逸脱したりすることのないままに諸要素の導入に成功した。そこに、『金光明経』が編纂・増広過程や伝承過程を通じて、常に「仏典」であり続けることができた大きな要因の一つがあると考えられる。

という結論を得たことで、本研究は所期の目的を達成した。

(3) 今後の展望

これまでの仏教学研究は、主として教理面からのアプローチが中心であった。インド哲学として発展してきた近代仏教学にとって、教理面からのアプローチが最優先で行われるべき事業であったことに異論はない。しかし教理面からのアプローチを優先する余り、「インドの仏教者が何を考えていたか」についての理解が深められたのに対し、「インドの仏教者は実際には何をしていたのか」という、〈インド仏教の実像理解〉が立ち後れていることも事実である。そこには、「律よりも経を重視 (生活規定よりも教義を重視) する」という北伝大乘仏教の伝統を受け継いだ、日本における仏教の性格も反映していよう。

今回の研究『金光明経』を通して見るインド大乘仏教の姿は、従来律文献や考古資料を通して行われてきた〈インド仏教の実像理解〉に資する研究成果を、經典の側から眺

付け補強し、さらに発展させたものである。これは同時に、従来は教理面からのアプローチのみに用いられることの多かった経典という文献に、〈インド仏教の実像理解〉のために活用できる可能性を実証したものともなっている。

この点に鑑みると、本研究の成果は前述の(1)、(2)のみにとどまるものではなく、「経典文献の新たな可能性の提示」を通して、「他の経典を用いての〈インド仏教の実像理解〉に資する研究」を触発する点にも求められて良いであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①SUZUKI Takayasu, The Characteristics of “the Five Chapters on the Various Gods and Goddesses” in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 査読有, Vol.115, 2008, pp. 66-73.

②SUZUKI Takayasu, The Attainment of Supreme Enlightenment through the Offerings Represented in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 査読有, Vol.118, 2009, pp. 78-86.

③SUZUKI Takayasu, Linking the Buddha's Attainment of Supreme Enlightenment to the Welfare of Beings in the *Suvarṇaprabhāsa*, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 査読有, Vol.121, 2010, pp. 62-70.

[学会発表] (計3件)

①鈴木隆泰、〈諸天に関する五品〉より見た『金光明経』の編纂意図、日本印度学仏教学会第58回学術大会、2007年9月4日、四国大学。

②鈴木隆泰、『金光明経』における法性のストゥーパと衆生利益 —前生譚を通じた「諸天薬叉護持品」への接統一、日本印度学仏教学会第59回学術大会、2008年9月4日、愛知学院大学。

③鈴木隆泰、『金光明経』に説かれる釈尊の法身獲得と衆生利益の接統一、日本印度学仏教学会第60回学術大会、2009年9月8日、大谷大学。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<http://suzuki.ypu.jp/research.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 隆泰 (SUZUKI TAKAYASU)

山口県立大学・国際文化学部・教授

研究者番号: 20282709

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: